

聴覚障害者のスキルアップ・ステップアップのための の書記日本語教育法およびマニュアルの開発：エ ラーアナリシスを中心に

著者	斉藤 くるみ
雑誌名	日本社会事業大学研究紀要
巻	61
ページ	173-200
発行年	2015-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1137/00000335/

聴覚障害者のスキルアップ・ステップアップの ための書記日本語教育法およびマニュアルの開発 ～エラーアナリシスを中心に

斉 藤 くるみ

Developing Teaching method and a Manual of Japanese for Deaf and Hard of Hearings

Kurumi Saito

Abstract: This is the 2013 report of subsidized research by *Mizuho Fukushi Jyosei Zaidan* (=Mizuho social welfare subsidiary foundation.) Writings by Deaf and hard of hearing indicate the lack of experience in Japanese listening, and insufficient syntactic and pragmatic knowledge. In this report, I analyzed the writing errors made by Deaf and hard of hearing, syntactically, semantically and pragmatically. Errors of native signers of Japanese Sign Language also reflect syntactic characteristics of their native language. The most frequent errors are those of case particles. Errors of hard of hearing and post-linguistic deaf students sometimes reflect insufficient phonetic and phonological knowledge of Japanese language. Faint memories of words and idioms become apparent from vocabulary and idiomatic errors. (Based on this result of error analysis, the team members and I made a manual for improving writing skills of both signers and non-signers who have hearing impairment.)

Keywords: Deaf, Hard of Hearing, Error Analysis, Japanese Literacy, Manual

現在まで、聴覚障害者の書記日本語の実用的運用能力の改善を目指すための教授法や教材は、日本においては、開発されてこなかった。しかし ICT の発達と相まって書記日本語のスキルが高ければ、必ずしも発話ができなくても、今や能力を発揮できる職種は十分あるし、高等教育機関への入学、そしてその後の学習にも支障は少なくなる。本研究では、書記日本語のエラーアナリシスに基づき、統語論的・形態論的・意味論的習得及び語用論習得のための教授法を体系的に構築することを目指した。ろう者・難聴者の言語パフォーマンスを資料とし、エラーアナリシスを行ったところ、日本手話者については主に日本手話の統語論的影響が現れ、難聴者については主にろう覚えや経験不足からの意味論的・語用論的エラーが現れた。それらを集中的に修正するような教授法や教材が有効であると考えられた。(本報告書を基にろう・難聴児の進学や就労に有益な書記言語習得のためのリーフレットを作成した。)

キーワード: ろう者、難聴者、エラーアナリシス、書記日本語、マニュアル

はじめに

聴覚障害者が社会参加する、あるいは高等教育進学をする際、不利益になる要因に書記日本語の実用的運用能力の問題がある。これは日本語文法力等の問題とソーシャルスキルの問題に分けられる。前者は、日本手話者については母語と日本語の統語論・形態論的差異が主な原因であり、難聴者等日本語話者については音韻論的な問題と経験の偏りが主な原因であると考えられる。また後者、すなわちソーシャルスキルについては、聴覚障害者と健聴者の文化的・認知的な違いが日本語語用論（表現の方法・マナー等）の習得の障害になるのではないかと考えられる。このようなことはこれまで考慮されず、聴覚障害者については聞こえないことそのものが、社会参加や進学の妨げと考えられてきた。しかし、たとえば震災などもあり、急務となってきた聴覚障害当事者のソーシャルワーカー・教師・医療従事者等の養成・増員については、実はその職種に必要な知識・経験はあっても、書記日本語のスキルがないことで資格が取得できなかったり、期待する就職先に就職できない聴覚障害者が多いということが明らかになってきた。

日本においては、現在まで、書記日本語の実用的運用能力の改善を目指すための教授法や教材は開発されてこなかった。しかし ICT の発達と相まって書記日本語のスキルが高ければ、必ずしも発話ができなくても、今や能力を発揮できる職種は十分あるし、高等教育機関への入学、そしてその後の学習にも支障は少なくなる。

本研究では聴覚障害者の言語的・文化的特徴を配慮した上で、言語習得理論に基づいたエラーアナリシスにより、書記日本語の統語論的・形態論的側面の習得及び語用論習得のための教授法を体系的に構築することを目指した。そして、聴覚障害者の就労・進学に必要な書記日本語をマスターするためのマニュアルを作成した。

I. 研究の背景と研究方法

聴覚障害児の発音練習には、膨大な時間が費やされる。しかしこれは言語学的には日本語自体の習得とは別のものである。音を利用して言語を習得していく健聴者の外国語習得には発音の練習が文法や語彙の習得に結び付くこともあり得るが、聴覚障害者にとっては必ずしも結びつくものではない。聴覚障害者の中で日本手話を母語とする者は、手話の文法の影響で格助詞にエラーが多く、これは明らかに日本手話がものごとの関係性を手の動きや向きの方角性で表す言語であるためである。また日本手話ではなく日本語対应手話や口話（こうわ）で育った聴覚障害者の場合も日本語が自然に耳に入らないため、屈折の誤りや語用論的（pragmatic）な誤りがある。このように聴覚障害者の日本語のエラーには共通性があることはしばしば指摘されてきたが、これらをシステマティックに分析した上で効率的な教授法を開発することはなされてこなかった。語用論的に不適切な表現をした場合に、日本語を流暢に書ける聴覚障害者ほど、言語の問題という理解が得られず、人間関係を悪くすることがあるが、日本語においては、聴覚障害者のための語用論的な教授法が検討されたことはない。

一方、障害者基本法第三条一三に「全て障害者は、可能な限り、言語（手話を含む。）その他の意思疎通のための手段についての選択の機会が確保されるとともに、情報の取得又は利用のための手段についての選択の機会の拡大が図られること。」とあり、障害者総合支援法附則にも「手話通訳等を行う者の派遣その他の聴覚、言語機能、音声機能その他の障害のため意思疎通を図ることに支障がある障害者等に対する支援の在り方」を施行後三年間で検討することになっており、文科省では「障がいのある学生の就学支援に関する検討会」が重ねられている。この検討会でも「情報・コミュニケーション及び教材の配慮」が論じられている。障害者権利条約では、「手話は言語である」と定義しており、その中で、ろう児が手話を「獲得」する権利、母語とする権利も謳われている。国連憲章、国際人権規約は言語の平等を規定していることから、あらゆる場面に関わって、手話を音声言語と差別してはならず、同等の扱いをすることが国際的には常識となりつつある。つまり、手話を母語とする権利を保ちながら、書記日本語力を醸成することが必須になってきた。このことは聴覚障害児のリタラシー自体のとらえ方を大きく変えている。聴覚障害児のリタラシーに問題があると言われてきたのは、リタラシーとは何かを教えるときに、英語、日本語などの音声言語を書記化したものしか眼中になかったからである。

本研究では、手話者にはその母語を重視し、日本語については書記日本語に特化して習得すべきという立場から書記日本語のマニュアル作りを目指した。就労支援・進学支援に必要な日本語力・ソーシャルスキルの基準設定を目指し、ろう者の言語パフォーマンスを資料として、エラーアナリシスを行った。様々な形で聴覚障害者の支援をする過程で、当事者とのやりとりでデータになるものを利用し、かつ新たな資料として、課題を設定して実験的データを収集した。多くの聴覚障害者と接触することによって得られた発話や作文から、社会人と学生・高校生に分けて、エラーのデータ収集を行った。その後、実験場面として、面接試験のシミュレーションや、小論文課題を与える等を行った。

それらエラーのデータを分析して書記日本語を使う場合の聴覚障害者のウイークポイントを修正するような教授法や教材を検討しつつ、ろう者の進学や就労に有益な書記言語習得のためのリーフレットを作成した（「学校だけではわからない。コミュニケーションスキルアップ・ハンドブック」参照。）

以下、言語学的にそのデータを分析した結果を示す。一定の期間に入ったメールをすべて資料とした。資料となった文は全部で 162 文、その中のエラーの数は 134 であった。

II. エラーアナリシス

以下はエラーアナリシスの結果である。番号は III ～ VI の資料に付記した資料番号とエラーの部分を表す数字である。つまり「1-1」とは「資料 1 の(1)」を表す。III の(資料 1)の例を示すと、

（資料 1）

おはようございます。お久しぶりですね。朝早い(1) LINE を失礼します。昨夕は■がそちらに

行きましたか。今日は行きません(2)ので本当に申し訳ありません。日程が(3)(4)わかったらご連絡を待ちます。よろしくお願いします。

の中の、「LINEを失礼します」のエラーは1-1と記して、「1. 格助詞のエラー」に分類されている。また「ので」は「2. 接続詞および接続助詞のエラー」の中に1-2として分類されている。「わかったらご連絡を待ちます。」の「わかったら」と「わかるまで」の間違ひは、1-3として、「2. 接続詞および接続助詞のエラー」の中に、「ご連絡～待ちます」という敬語の使い方については「3. 敬語の文法ミス」というところに1-4として、それぞれエントリーされている。二か所にエントリーされているものもある。詳細は後ほどⅢ～Ⅴで解説する。

1. 格助詞のエラー（47例）

格助詞は手話では動きの方向で表されるので、日本手話者は日本語の格助詞のエラーが非常に多い。

1-1, 2-1, 2-2, 6-1, 6-2, 7-3, 7-4, 10-1, 10-3, 10-4, 10-7, 11-3, 11-7, 11-9, 11-10, 11-11, 11-12, 14-1, 16-1, 17-1, 17-4, 17-5, 21-1, 23-1, 24-1, 25-1, 28-1, 29-1, 30-3, 33-2, 36-1, 37-4, 38-1, 40-1, 41-1, 43-1, 45-2, 46-2, 49-2, 50-1, 50-2, 50-3, 50-4, 54-1, 54-2, 55-1, 55-3

2. 接続詞および接続助詞のエラー（4例）

1-2, 1-3, 22-1, 54-3,

3. 敬語の統語論的ミス（4例）

1-4, 9-3, 16-2, 19-4

4. 受動態・能動態および意味的に態が関わる（「行く」「来る」や「あげる」「もらう」）のエラー（9例）

これらの表現は手話では手の動きの方向で的確に表せるために日本語で表すことが苦手な人が多い。

3-1, 3-3, 7-3, 9-2, 11-5, 42-1, 43-3, 52-2, 53-1

5. 意味論的エラー（24例）

教科書をどこかに置いてきてしまった、という意味で「教科書を置いてしまった」というように、使い方を間違えているもので、統語論的エラーと重複するものも含む。

8-1, 10-2, 11-4, 11-8, 11-1, 17-5, 24-2, 25-2, 26-1, 27-1, 30-1, 30-2, 31-1, 32-1, 33-1, 34-1, 35-2, 37-2, 37-3, 39-1, 40-1, 51-3, 52-1, 55-2

6. 文体（口語・丁寧語の使い方）（29例）

フォーマルな問い合わせに「わかりにくいんです」というような表現を使ってしまう例など

がある。

2-1, 2-3, 3-2, 5-1, 6-3, 6-4, 7-2, 10-5, 10-6, 11-6, 12-1, 15-2, 16-1, 17-3, 17-8, 18-1, 19-3 20-1, 20-2, 20-3, 43-2, 45-1, 46-3, 47-2, 48-1, 49-1, 50-5, 51-2

7. 複合語の使い方（4例）

これは聴覚障がい者の特徴的なエラーである。たとえば「振り込みます」というのと「銀行振り込み」という表現を「銀行振り込みます」というふうに表すエラーである。

9-1, 11-2, 44-1, 51-1,

8. その他（13例）

40-2の「睡眠魔に負ける」というような造語がある。また「すっかり」を「すっかりと」と書いてしまったり、「いつまでたっても～」の後に否定の表現がないなど、難聴者に見られるあいまいな覚え方が現れた例がある。

15-1, 17-7, 18-1, 19-2, 21-2, 35-1, 37-1, 40-2, 44-2, 46-1, 47-1, 55-4, 55-5

また

（資料4）当日は〇〇は部活があり、悩みましたが、今朝の朝日新聞に載っており、25日もあるのですが、スペシャルデーはないのでしょうか？

については、個々の語句にエラーはないが句同士の関係や主語がねじれていて、文全体としてはエラーになっている。

（資料6）私の息子と相談して春期講習を受けたいと言ったので・・・申し込みをしてくださるようよろしくお願いします。

も同様である。

以下Ⅲ～Ⅴで、詳細を説明する。

Ⅲ. 成人のメールより

以下はろう者の成人のメールの文章とその分析（エラーアナリシス）である。

（資料1）

おはようございます。お久しぶりですね。朝早い(1) LINE を失礼します。昨夕は■がそちらに行きましたか。今日は行きません(2) ので 本当に申し訳ありません。日程が(3)(4) わかったらご連絡を待ちます。 よろしく申し上げます。

（分析1）

「LINE を」は「LINE で」とすべきである。格助詞の統語論的エラーであるが「～を失礼します」という表現は必ずしも誤りではない。LINE という手段を表す場合、与格のマーキングが必要

であるが、「～を失礼します」という言い方を覚えているために、そちらを優先している。「行きませんので本当に申し訳ありません」は「行きませんが本当に申し訳ありません」というべきである。これは「ので」は理由を表すが、やはり「行きませんので」と「～ので本当に申し訳ありません」はそれだけ見ると問題ない。形態素レベルのエラーではない。外国人の日本語のエラーとは質がちがう。

「日程がわかったらご連絡を待ちます」は「ご連絡」という丁寧語に「お待ちします」という文体がふさわしいという意味では語用論的エラーである。また日程がわかるというのは addressor（本人）であり、連絡を待つのは addressee（相手）であると思われ、統語論的なエラーであり、これはコミュニケーションに支障をきたすレベルのエラーである。あるいは自分が連絡するのを控えるという意味を「待つ」と表現しているのかもしれない。その場合、「たら」がエラーで「わかるまでご連絡を控えます」というべきである。そうであれば、意味論レベルの誤りである。

（資料 2）

まだ高 1 なので、明日は色々を見て、(1)(2)やりたい学部が見つけたら…と(3)思っています。

（分析 2）

「学部が見つけたら」は「学部を見つけたら」とすべきで、統語論的(格の)エラーである。「思っています」は口語体で、教師に対しては「思っています」とすべきである。これは語用論的な問題である。

（資料 3）

明日は自由行動で〇〇大学に行きます。(1)パソコンでは受付終了と載せましたが、学校の雰囲気を見たいと(2)思って娘と二人で(3)歩き回って行きます。

（分析 3）

「受付終了と載せましたが」は「受付終了と載っていました」という意味である。「載せる」という動詞の主語との関係から見てエラーである。つまり節レベルの統語論的なエラーである。「思って」と「歩き回って行きます」は「歩き回って来ます」とすべきで、「歩き回って」と「行く」は意味論的エラー（「行く」はある方向を目指していることが前提）が原因で不自然なのである。またここでは addressor との関係で、「行く」「来る」動詞の語用論的エラーがある。この場合 addressor が〇〇大学の人であっても、なくても、「〇〇大学に行きます」は正しいが、「歩き回って行きます」を「歩き回って来ます。」にすれば自然な正しい文になる。あるいは「歩き回りに行きます」というふうに訂正してもよい。「歩き回って行きます」は統語論的には正しいが意味論的レベルのエラーと考えられる。「思って」は統語論的・意味論的には間違えではないが、教師に対してメールをするには「思い」あるいは「思いまして」とすべきである。これは語用論的なエラーである。

(資料4)

当日は〇〇は部活があり、悩みましたが、今朝の朝日新聞に載っており、25日もあるのですが、スペシャルデーはないのでしょうか？

(分析4)

これは24日25日が大学のオープンキャンパスであること、そのうち24日はろう者スペシャルデーであるとしてある新聞記事を読んだの問い合わせである。〇〇は子どもの名前である。「スペシャルデーは」の前に「この日には」と補えば意味がわかるが、そうでなければ理解が難しい。あるいは「25日もあるとのことですが」とすればわかりやすい。この二点の訂正が理解しやすくする理由はなんだろうか。「25日もある」と「スペシャルデーはない」というのが並列に見えるため、25日が存在するが、スペシャルデーが存在するか否か、という意味を期待させるのである。つまり同じ動詞をもつ節が二つあることで並列であると思う、認知的な統語論の規則があることを示唆している。「25日にもあり」と助詞を変えると、その日の中「にも」スペシャルデーがある、という意味になり、スペシャルデーが25日に内包されていることがわかり、それだけで理解が可能になる。

(資料5)

分かりました。(1)でしたらば、26日(月)のみ参加致します。

(分析5)

「でしたらば」という表現は明確に間違いとは言えないが、資料1や資料3の語用論上のエラーと見なせるもので、聴覚障害を持つ人の日本語のひとつの特徴と思われる。

(資料6)

こんばんは。突然(1)メールを失礼します。〇〇さんから紹介いただいた〇〇です。(2)昨夜で、ちょっと見学したり、話したりして(3)くれて本当にありがとうございました。今日、(4)私の息子と相談して春期講習を受けたいと言ったので、3月30日、31日2日間で数学と英語を講習したいので受講を(5)申込みしてくださるようよろしく申し上げます。私の息子の名前は〇〇と申します。

では、お返事を(6)待ってます。

〇〇の母

(分析6)

「メールを失礼します。」「昨夜で」は資料1と同じ格助詞のエラーである。また「ちょっと見学したり、話したりしてくれて」は見学したのは addressor であり、話してくれた人は addressee である。これを「たり・・・たり」と並列にすることはできない。「見学させたり話したりしてくれて」とすれば統語論的なエラーは正される。しかしさらに教師にメールをして

いるので、「見学させてくださったり、お話してくださったり」とするのがマナーである。言語学的に言えば語用論的エラーである。「私の息子と相談して春期講習を受けたいと言ったので」、「相談して」は「相談したら」とすべきであるが、これはどのような理由からエラーと判断されるのであろうか。「相談したら」とすると時間的な順番と共に結果がかわったことを表すが、「相談して」とすると「相談してから」受けたいという意味か「相談したので」受けたいのか不明確であり、書き言葉では避ける傾向が強い。「相談して春期講習を受けたいと言ったので」という表現は口語ならば問題ないのである。書記日本語にすると、あいまいさが目立ってしまう。この表現はこのメールの背景を知らなければ、かならずしも間違いではない。資料2にも見られたように、口語的な表現が混じるのは聴覚障害者の日本語の特徴でもある。「待ってます」も「待っています」とすべきである。

（資料7）

(1) こんばんは一

大変(2) ご無沙汰してます。

〇〇の母です。夏休みはご紹介を頂き、ありがとうございました。

突然のメールで失礼します。

4月から娘は高校生になります。(3) 学習塾を通わせたいと考えています。

明日、同級生のお母さんと一緒に(4) 30分位で見学したいのですか、ご都合は如何でしょうか？

（分析7）

まずマナーの点で教師に「こんばんは一」とはふつうは書かない。ここでもまた「ご無沙汰してます」という口語体が現れており、語用論的に不適切である。さらに「学習塾を通わせたい」は格助詞のエラーがある。「30分位で」は「30分位」のほうが自然な日本語である。「30分位で」は非文ではないが、時間の表現に「～で」がつくと意味的には「～後に」か「～間に」を表すので、この文脈ではエラーと言える。

（資料8）

度々すみません。

〇〇が(1) 数学と英語の教科書は学校に置いてしまったようです。申し訳ありません。

（分析8）

「置いてしまった」は置いてはいけないところに何かを置いたという意味になる。「置いてきてしまった」とすべきで、「置いてしまった」は非文ではないが意味論的かつ統語論的に適切ではない。

（資料9）

〇〇さん本日はいらっしゃっているので、△△は(1) 銀行振り込みますので、教えて下さい。

〇〇さんは町田からいらっしゃっているとの事。分かりました。まとめて支払いさせていただきます。次回、(2)私は来れませんので、本日のみ、〇〇さんと(3)ご一緒にランチなさってもよろしいのでしょうか？

(分析 9)

「銀行振込み」は名詞であり、「ます」が続くことはあり得ない。これは統語論的なエラーである。またこの文脈は addressor が〇〇さんと昼食をともにしたいという申し出であった。この場合「ランチなさっても」という敬語を使っているのは語用論的に重大なエラーである。謙譲語の「ランチさせていただいても」というのが適切な形である。

(資料 10)

(1)大学ついて

(2)先日、(3)〇〇学会をお疲れさまでした。

(4)〇〇さんに通して紹介していただきました△△です。

早速、(5)〇〇大学の HP ちらっと拝見しました。

内容的には(6)わかりにくいんですが、条件に合ったコースとか、(7)試験過去問も参考したく載せてありません。また、見落としたのかもしれませんが。先日、お話していただいた事をもう一度、教えていただけますか？

(分析 10)

この文は両親ともにろう者で、みごとな日本手話者である中年のろう者が書いたものである。このメールの件名の「大学ついて」は「大学について」の誤りである。統語論的誤りであるが、このエラーは日本語を外国語とする人の中でも、かなり初歩的なミスである。「先日」は「先日は」というべきでエラーとまでは言えないが不自然である。ここでも「〇〇学会をお疲れさまでした。」と格助詞のエラーがある。また「ちらっと」と「拝見する」が共起するのは文体として適切ではない。特にこの場合、「〇〇大学」の教員に対してのメールなので「ちらっと」しか見ないと言うのは失礼になる。マナーの問題であるが、「ちらっと」という語彙のニュアンスが理解されていない可能性がある。

(資料 11)

ご連絡頂きありがとうございます。

(1)現時点、(2)ボランティア活動しておりません。

去年 9 月頃まで社内手話講習会の(3)手話指導にてボランティア活動しておりました。

つまり、(4)条件に合っていないことでしょうか？

私の履歴を記載しますが、大学に適切かどうか(5)確認させてください。

・・・中略・・・

ちなみに (6) 〇〇さんから紹介では、

まず、(7) 2年間に毎週土曜日？〇〇講義を受けてみたらどうかとのことで

そこからスタートしたいと考えています。

しかし、(8) 苦手科目が英語です。大丈夫でしょうか？

(9) つきまして、12月7日(土) (10) 〇〇大学で〇〇学に行きますので、(11) ついで資料を頂きたいと思います。よろしくお願いします。

(分析 11)

「ボランティア活動しておりません。」は「ボランティア活動を」とすべきである。あるいは「ボランティアで (は) 活動しておりません」としてもよい。この場合も「活動しておりません」という表現自体は問題ない。「〇〇活動」となると複合名詞となり動詞の振る舞いはできない。形態論・統語論的問題であり、これは資料9の「銀行振り込みます」と同じ間違いである (addressor は同一人物ではない。)

「手話指導にてボランティア活動して」も助詞にエラーがある「手話指導のボランティア活動をして」が適切である。「ボランティア活動して」は前述の通り。

「条件に合っていないことでしょうか？」は「問題は条件に合っていないことでしょうか？」という文脈ならば非文ではない。そうではなく、この文脈は「自分は条件に合っていないということでしょうか。」という意味である。

「大学に適切かどうか確認させてください。」についても意味としては「大学に」「確認してください。」ということである。「大学に」「確認させてください」であると誰かが大学に確認することを命令するという意味になってしまう。しかし文脈はそういう意味ではない。「させる」という助動詞の使いかたの誤りで統語論的な間違いである。

「ちなみに〇〇さんから紹介では」は、「〇〇さんからの紹介では」というのが正しい。これは「紹介では」という表現から「紹介」は名詞であるので「～から」という副詞は係り得ない。さらに授業を受けてみては、と勧められたことを「紹介」とするのは適切ではない。これは意味論的なエラーである。

「2年間に毎週土曜日？〇〇講義を受けてみたらどうか」という部分は「2年間、」とすべきである。助詞のない、名詞の副詞化された形を使うのが苦手というのも、聴覚障害者の特徴である。

「つきまして、」は「つきましては」の誤り、「12月7日(土) 〇〇大学で〇〇学に行きます」は「12月7日(土) 〇〇大学へ〇〇学を受講しに行きます」とすべきである。これらはすべて助詞の誤りで、間接目的、直接目的の助詞のエラーである。「ついで」も「ついでに」であるべきで、助詞のエラーである。

(資料 12)

野球部の3月の予定表が、出るまで(1) 待っても大丈夫ですか？

(分析 12)

この文は「野球部の3月の予定表が出るまで、待っていただいてもよろしいですか。」というのが正しい。句点の位置が間違っている。さらに「待っても」という主語との関係が統語論的に間違っている。「大丈夫ですか」というのは一般的に使われるようになっているが、目上の人に使うのは適切ではない。

(資料 13)

英語だけ、(1)参加することです。

(分析 13)

この文は「英語だけ、参加するということです」または「英語だけ参加いたします」という意味である。「こと」という補文マーカーのエラーで、「すること」という形は存在するが、この意味で使う場合にあは統語論的にエラーである。

(資料 14)

こんばんは

大変お世話になりました、ありがとうございました。

ここからは〇〇の感想より、(1)本人が打ってもらいました。

(分析 14)

「本人に打ってもらいました」という意味で、助詞のエラーが見られる。

(資料 15)

すみません

(1)すっかりと忘れてしまいました。今夜聞いてみますので。〇〇は大会で(2)外出してます。

(分析 15)

「すっかり」を「すっかりと」と間違えるのは「しっかりと」「すっきりと」などのアナロジーと考えられる。(2)は語用論的エラーである。

(資料 16)

(1)早速メールありがとうございました。

遅れて途中から(2)参加していただいても大丈夫ですね。了解しました。ありがとうございました。

(分析 16)

「メールありがとうございました」は、語用論的に「メールをありがとうございました。」の

ほうが適切である。「参加していただいても大丈夫ですね」は「参加させていただいてもよろしいでしょうか。」というべき文脈であった。敬語の際の統語論的エラーである。

(資料 17)

こんばんは。(1)お返事を遅くなってしまって本当に申し訳ありません。
〇〇が授業を受けてみたら(2)分かりやすくてはいいでした。と言っていました。
毎週金曜日には部活動日(3)なんですが、(4)部活動が終わるのは18時になっていますので、
(5)部活動が終わったら遅れて行っても(6)無理でしょうか？まだ(7)〇〇が考えているみたい
です。ちょっと待ってくださいますか？
(8)土曜日の方が良かったけどね。

(分析 17)

「お返事を」、「部活動を」はいずれも「が」と「を」を間違っている。「わかりやすくてはいいでした」の「は」と「いいでした」はいずれも統語論的エラーである。「いいでした」(よいでした)は「よかったです」としなければならない。形容詞の過去形の間違いである。「形容詞+です」を過去形にする場合形容詞自体を過去形にしなければならない。二度「部活動が終わる」という助詞のエラーがあり、「遅れて行っても無理でしょうか」は「遅れて行ってはだめでしょうか」とするか、「遅れて行ってもよいでしょうか」とすべきである。さらに「申し訳ありません」や「くださいますか」というスタイルに比べて、最後に「土曜日の方が良かったけどね」となるのは、非常に不釣り合いで、addressor が日本語を母語としないということを理解してもらわなければ、無礼と思われるか、ふざけているように思われる危険性がある。

(資料 18)

参加人数が多い日に行いますので選択のうえ、(1)急ぎとは存じますが、23日(水)までにご連絡くださいますよう、ご協力のほどよろしくお願い致します。

(分析 18)

「急ぎとは存じますが」は「お急ぎとは存じますが」とすべきで、敬語のエラーである。また意味的には「お忙しいとは」の誤りであろう。

(資料 19)

手話にこだわらず筆談やホワイトボードなどの(1)ご使用でも色々な(2)可能をご活用していただいてもよろしいかと存じますのでぜひご検討いただきたく思います。((3)なんか無理にお願いしてと思いますが〇〇先生からも(4)オススメしております☆)

(分析 19)

これは教師に対するメールで、「ご使用」の「ご」はあってもなくてもかまわないが、「ご活

用していただいて」の「ご」はないほうがより自然である。「可能を」は「可能性」でなければならない。「可能」は形容動詞であるが、この addressor は名詞の扱いをしている。

「なんか」と「お願いしてる」はインフォーマル過ぎる印象を与える。語用論的な問題である。「〇〇先生からもオススメしております」は「〇〇先生からもお勧めいただいています。」が一番よい表現である。カタカナはインフォーマル過ぎるし、「しております」は謙譲語なのでエラーである。

(資料 20)

(1)良かった。塾の日だから忘れないうちにちゃんと塾に行ったかなと気になって LINE した
(2)訳です。本当にすみません。来週も(3)行けるならよろしくお願いします。

(分析 20)

教師に対しては「良かった」ではなく、「良かったです。」が正しいし、「だから」も「ですので」とすべきである。両者とも語用論の問題である。「LINE した訳です」もインフォーマルすぎる。「行けるなら」は「うかがえるようなら」が最も適切な表現である。

IV. 学生・生徒のメールから

以下は学生・生徒という若い世代の聴覚障害者からのメールであるが、成人の文に比べて、句読点がまったくないものが多いという特徴がある。その他の統語論のエラーは成人のエラーと傾向は同じであるが、若者ことばや口語体をどの程度目上の人に使ったらよいかということが理解されていない例が目立つ。

以下に例とアナリシスを列举する。

(資料 21)

(1)地元に夏のセールで可愛いスカートを買った。やっぱセールは安すぎるし(2)お金に優しいよね。

(分析 21)

ここでも「地元に」と、助詞のエラーがある。「に」は動きを示す動詞と共起する方向性を含む助詞である。「～すぎる」は語用論的に否定的な意味のときに使うことばである。「お金に優しい」は意味論的に誤りである。

(資料 22)

暑苦しくて目覚めちゃった。(1)しかも 5 時前に起きるの久々だわ笑

(分析 22)

「しかも」という接続詞は適切ではない。「～だわ」「笑」は一般の大学生の流行の表現である。

(資料 23)

(1)医師がアキレス腱何本か上手くくっついてないって言われたのよー

(分析 23)

「医師が」は「医師に」の誤りである。ここも助詞のエラーである。

(資料 24)

(1)ヘアカラーを染めた。(2)一瞬、見たら気に入ったわ。

(分析 24)

「ヘカラーで」とするか、「髪を染めた」とするべきである。「一瞬、見たら」は「見たらすぐに」の意味で、意味論的エラーである。

(資料 25)

愛犬大丈夫かな…あの様子じゃ大丈夫じゃないんだよね。だって足の(1)関節が痛めてるしさ。親は仕事でいないし愛犬だけ(2)留守だもん。○○がなければ病院に連れて行けるのに。

(分析 25)

「関節が痛めている」も助詞の間違いである。「留守」は「留守番」を意味する。意味論的な間違いである。

(資料 26)

スノーホワイトをカンショウしたんだが(1)ストーリー的内容だった。

(分析 26)

「ストーリー的」というのは何を意図するのか不明であるが、「ストーリー」の意味を間違えて覚えている。

(資料 27)

雨天のせいで花火大会が(1)中止になった。でも花火は見れてよかった！新しい友達が作れて楽しかった。また遊びたいな！

(分析 27)

「雨天のせいで」はやや不自然である。「雨のせいで」または「雨天のため」としたほうが自

然なのは、語用論的な問題である。また「大会が中止」という場合は大会は開かれなかった印象を与えるので、次の、花火が見られたという記述を含めると、エラーと言える。「中止」は途中で終わることを言っているのである。確かに「中止」という言葉は途中で打ち切りということの意味することもあるが、主語が「大会」などという場合は「途中で中止になった」と言わなければ、開催されなかったと言う意味になる。しかしろう者にとっては、視覚的に見て「中止」は途中で辞めることと理解されやすい。

(資料 28)

聞えないけど頑張る ww (1)筆談とかにお願いしてもらおう！

(分析 28)

ここでも「筆談とかに」に助詞のエラーがある。「お願いする」という動詞が間接目的語と直接目的語を伴い、それぞれ助詞「に」と「を」が必要であると言う統語論的な問題である。

(資料 29)

でもなんで障害者になったんだろう？(1)〇〇に勉強する意味がここにあるの？

(分析 29)

この〇〇は科目の名前である。「〇〇を勉強する」の誤りで、「ここに」も不自然である。

「ここで勉強する意味があるの？」ということが言いたいのだと考えられるが、意味的にはたしかにここにあるでも可能である。

(資料 30)

わたしのことをどう思ってるのかな。難聴であることを理解はしてるんだけど。みんなふつうに話してる。(1)だがしかし、私がけが置いてけぼりで(2)罪悪感が感じる。(3)所詮、今まで難聴を抱えて生きてきたんだろう。

(分析 30)

「だがしかし」はフォーマルで、この文脈や、言い回しから不釣り合いである。語用論的に不自然である。「私がけ」は「私だけ」のミスタイピングであるとして、「罪悪感が感じる」は明らかに助詞のエラーである。「所詮」が前後の文のつながりから、不自然である。ディスコース（談話）文法のエラーと言える。「生きてきたんだろう」という推量形も自分のことなので適切ではない。これは語用論的な問題である。

(資料 31)

ケーキだと、(1)どっぷりお腹にたまっちゃうからさー。

(分析 31)

「どっぷり」という擬態語の使い方が不適切である。「どっぷり」というのは確かに日本語の語彙にあるが、意味的には人が何かに入り込む状態をいうのである。おそらく「たっぷり」の間違いであろう。

(資料 32)

生徒会をつとめている人が(1)熱など病気になってしまっで代わりにやってくれーと頼んでいるのに、誰も返事なし。

(分析 32)

「など」の使い方が不自然である。「発熱その他」ということを表しているようである。「病気で熱もあるし、」というような表現ならば適切である。

(資料 33)

(1)電波の悪いとこの(2)上らへんで泊りに行ったから、携帯使えなかった。

(分析 33)

「悪いとこ山の」は「悪いところで」が正しい。「山の上らへんで」はやはり助詞のエラーを含む(「に」とすべき)。「～らへん」は若者ことばとしてはよく見られるもので、正式な日本語とみる人は少ないと思われる。

(資料 34)

おはようございます。今日は雨と風が強烈ですね(*_*)

みなさん出かけるときは出来るだけ(1)外出を控えてくださいね!!

(分析 34)

この文は「外出」という意味を誤って覚えていると思われる。出かけても、なるべく屋外にいないように、という意味であると思われる。

(資料 35)

ぢゃなきやいつまで(1)たっても逃げてはだめだよね

今日ゆわれて傷ついたけどこのまま(2)ネガティブにしたくない

(分析 35)

「ぢゃなきや」の文字の使い方はジョークなのかもしれない。「ゆわれて」も文字の選び方に問題がある。これら二つは一般の学生にも見られるのでカウントしなかった。「ネガティブに～する」という表現はあるが、「ネガティブにする」という表現は非文とまで言えないが、適

切ではなく、意味もわかりにくい。意味論的な問題である。

(資料 36)

わたしのせいで(1)あの人にイライラさせちゃった。

(分析 36)

「あの人に」は「あの人を」であるが、これは「イライラさせる」という動詞が「に」をとらないという習慣的なものともいえるが、やはり聴者からみるとエラーと感じてしまう。たとえば「あの人にのんびりさせる」は問題なく、むしろ「あの人をのんびりさせる」のほうが不自然である。

(資料 37)

A：(1)体に無理しちゃダメだからね

B：(2)冬くらいは復帰できるかもだからそれまでに(3)首長く待ってて

A：久々の声を聞けて嬉しかった

B：学校で体に無理しちゃってるから

少しは休めって先生に言われた

ぢゃなきゃ(4)足に悪化しちゃうぞってさ

そんなの分かってるけど休んだら授業が遅れちゃうし嫌だから休みたくないんだよね

(分析 37)

「体に無理しちゃダメ」は「体に悪いから無理しちゃダメ」とするべきである。「冬くらいは復帰できるかもだから」、は「冬くらいには復帰できるかもしれないから」が正しいが、「かもだから」は若者言葉としてはときどき聞かれるものである。「には」を「は」としているのは統語論のエラーである。「それまでに首長く待ってて」も助詞のエラーがある。「それまでに」は「着く」というような瞬間動詞には係るが、「待ってて」のような継続動詞には係らない。「それまで」とする方が正しい。日本語を母語としない学習者には非常に難しいことは確かである。「久々の声を聞けて」も助詞の誤りを、「足に悪化しちゃうぞ」も助詞の誤りを含む。「体に無理しちゃってる」は非文ではないが不自然である。

(資料 38)

(1)中央線に乗ってる小学生が数人くらいいるんだけど

声がでかくてうるさいわ（´・ω・｀）

(分析 38)

「中央線に乗ってる小学生」は「中央線に乗ってる小学生」であるべきだが、「中央線に乗ってくる」ならば正しいので、間違えやすい。

(資料 39)

もし友達と仲が悪かったり悪口をゆったりすると関係が悪くなって(1)このまま仲直りするのに時間が必要だよ

でも友達を大切にしたいならまず自分のゆってることが正しいのか、間違えたら直接ゆえばいい

また相手の立場に立って考えることが必要だと思う

それぞれの人は合わなかったり合う人もいるけど

好き嫌いやあまり苦手とかは関係ないと思う

(分析 39)

まず「いう」を「ゆう」と書く学生は聴者も多い。「このまま」にすることと「仲直りする」のは意味的に矛盾するのであるから、意味論的なエラーとみなされる。「正しいのか、間違えたら直接ゆえばいい」も「正しいのか」に続く文として想定されるもの（正しいのかが問題だ、正しいのかどうかを考えよう等）がなく、「間違えたら」と続くので、不自然な文になっている。「合わなかったり」も、「たり」があるのにそれに並列の何かが欠けている。いずれも統語論的・語用論的な問題である。「合わない人も合う人もいるけど」とするのが適切である。

(資料 40)

昨日までは(1)夏休みを充実したけどあっとゆう間に終わっちゃった(´・_・`)

今日から後期が始まったけどお互いに頑張ろ(´・ω・´)

(2)睡眠魔に負けちゃうけど... わら

(分析 40)

「夏休みを充実したけど」は「満喫」したというような意味であると思われる。充実したという動詞に「を」という対格の助動詞は使えない。「睡眠魔」というのも、語彙のうろ覚えによる形態論的なエラーである。〇〇魔という形態論的語形成のエラーである。

(資料 41)

メールアドレスを変更したので、お手数ですが登録をお願いします。

(1)迷惑メールあったのでメールアドレス変えました。

(分析 41)

「迷惑メールあったので」は主格の助詞が抜けている。口語ではあり得るが、語用論的にそこまでの省略が許される文脈ではない。

(資料 42)

おはよ(*^^*) ございまーす!!

今日は〇〇くん試験ですよ。o(^o^)o
絶対受かって□□大にいきたい！

(分析 42)

「〇〇大にいきたい」というのは「〇〇くん□□行ってほしい」という意味か、自分も一緒に□□大に行きたいという意味かわからないが、どちらにしても統語論的に適切ではない。

(資料 43)

(1)教務かにコンピューターに履修登録したいのですが、やり方がわからないので(2)どーすればいいですかって(3)言われたので、図書館にいけばシルバーさんいるからって言われていったのに、シルバーさんもぜんぜんわからないひとばかりで、登録はできるのに、印刷ができなかったり、

(分析 43)

「教務かにコンピューターに履修登録したい」は、文脈から見ると「教務課にコンピューターで履修登録したい」が正しい。「言われたので」は「言ったら」の間違いである。前章の成人の発話にもあったように、しばしば受動態と能動態の誤りが見られる。「どーすれば」という書き方も目上の人を書くときには不自然である。

(資料 44)

10日は〇〇で簿記講座があり、(1)不参加しますが、次回から通います。宜しく願います。金曜日は部活があり、(2)6時半まで、そちらには7時過ぎになりそうです。ちなみに木曜日は部活なしです。

(分析 44)

「参加します」とは言えるが「不参加します」は言えない。これも複合名詞一般の規則がかかるためと考えられる。「6時半まで」を「部活」の前に置くべきである。「そちらには7時過ぎになりそうです」も「には～時になる」とは言えない。「に着くのは～時になる」と言う構造が必要で、これは「場所＋には」は副詞であり、名詞ではないためである。

(資料 45)

忙しくて(1)行ってなかった時期(2)あったけど本当にお世話になりました

(分析 45)

「行ってなかった」「時期あったけど」も口語体で、書き言葉、しかも教師へのメールには語用論的に不適切である。「時期があった」の助詞「が」も抜けている。

（資料 46）

児童教育学科で特別支援学校教諭に(1)なりたいことが夢です

でも、福祉学科は興味があって、(2)社会福祉士の勉強した方が良いと学科の先生から勧められました

どっちにするか(3)迷ってますが、指定校がある学科を選んだ方が安心ですよ！

（分析 46）

「なりたいことが夢」は補文マーカーの間違いである。「社会福祉士の勉強を」の助詞がぬけている。また「迷ってます」も教師に対する書き言葉としては、適切ではない。

（資料 47）

〇〇大学を受験する前に(1)(2)学科が2つ悩んでますよ～

（分析 47）

「悩んでますよ～」は教師に対する書き言葉としては不適切である。「学科が2つあって」とすべきである。

（資料 48）

〇〇学科と〇〇学科が(1)あるんですが、私自身は〇〇の方が合うかな～と考えています
もともと興味あって…

（分析 48）

もともと興味あって・・・という終わり方も、語用論的に不適切である。

（資料 49）

(1)ですよ～

(2)担任が福祉の方が合うかもっていわれました＼(^o^)/

（分析 49）

「ですよ～」という表記については前述（資料 48）の例と同じである。「担任が」ではなく「担任に」である。また「合うかもって」も口語体であり、教師に対するメールとしては不自然である。

（資料 50）

お久しぶりです (*^O^*)

進路のことについて志望大学や学部が決まらなくて
相当悩んでいます

私はやりたい仕事は

児童に関わる(2)仕事を就きたいと思っています

もともと(3)(4)心理学に興味あって(5)色んな大学の学部に行ったのですが…なかなか決まりません

どうしたらいいのかわかりません

教えてください

(分析 50)

句読点や改行の不自然なスタイルが表れている。「仕事を就きたい」「心理学に興味あって」は助詞のエラーを含む。「仕事」の場合「就く」という漢字を正しく使っており、日本語力としてアンバランスで、視覚的な覚え方は得意であることがわかる。

(資料 51)

8月5日は(1)他の大学キャンパスに行かなくてはならないので

他の日にして(2)くれませんか？

また私自身の(3)都合上で合わせて

参加したいと思っています。

(分析 51)

「他の大学キャンパス」は「他大学のキャンパス」のほうが自然である。また「都合上」は助詞を伴わない副詞の使い方の誤りである。またこの文脈では「都合に合わせて」とすべきで、「都合上」は使えない。「してくれませんか。」も語用論として適切ではない。

(資料 52)

(1)忘れ物が、あるので、遅れて(2)来ます

(分析 52)

「遅れて来ます」は「遅れて行きます」の誤りである。これは次の別の addressor の例にも表れている。

(資料 53)

今日は、会議室Cに(1)来た方がいいですか？

(分析 53)

「来た方がいい」は「行った方がいい」の誤りである。(資料 52)と同様の意味論的エラーである。

(資料 54)

家の用事があって(1)(2)授業始まる時間が遅れるかもしれない(3)ので、
もしかしたら 5 時半ぐらいには着くと思います。

(分析 54)

「授業始まる時間が」は「授業が始まる時間に」の誤りで、やはり助詞の選択および省略のエラーである。また「遅れるかもしれないので」は、「着くと思います」との関係からすると逆接の助詞（「けれども」等）でなければならない。

(資料 55)

学校の復習とか(1)(2)予習あれば助かります。(分らない時だけ)

理由、(3)忘れる時があります

2 時間目の国語中級は、(4)試してやってみてもし駄目だったらまた伝えます。

もし

国語中級、駄目だったら英語、(5)2 時間連続受けられるですか？

(分析 55)

「予習あれば」は助詞「が」が抜けている。「理由」も「理由は」とすべきである。「試してやってみて」は「試しにやってみて」というつもりであろう。「2 時間連続受けられるですか」には統語論の重要なエラーがある。「受けられるのですか」と補文マーカーを入れるか、「受けられますか」とすべきである。

以上のように、エラーをピックアップし、分析した。すべての話者の言語的背景は安易に判断できないが日本手話者には圧倒的に格助詞のエラーが多かった。一方、難聴者にはうる覚えによると思われることば使いのエラーが多い傾向があると思われた。

V. 実験場面でのエラーアナリシス

上記をふまえて、特定の目的を設定したエラーアナリシスも行った。すなわち今後スキルアップ研修に使える課題を考えながらデータを取った。また被験者にとってメリットがあるように、学校の授業や受験に役に立つ小論文や模擬面接を実施した。アンケート形式の自由記述や短文作成課題もやってもらった。その結果、明らかになった点を以下に挙げる。

(1) 実験場面 1－小論文

論文を書かせると、文法には注意する傾向があり、統語論的間違いはメールの場合ほど目立たない。しかし、論理的に書かなければならない状況下では語彙力の問題が鮮明化する。

たとえば道徳についての論文を書かせると、「習慣が身につけている」ことが大事だという記述があり、「習慣」ということばを「よい習慣」だけを意味すると思っていることがわかった。

「恥のないように人間性を身に着ける必要がある」というふうに「恥」ということばの意味を恥を感じるべきネガティブな「出来事」に限定している例もあった。また「子どもを産むと生活費は以前より負担し、共働きしないと生活費が苦しくなる」のように「負担し」を「多く負担する」ことのみに限定して覚えている例があった。負担という漢字からそのように感じられることはもっともであるが、漢字のイメージによる、正しい日本語との意味のずれがしばしば見られる。

また「被災者の人々」のように意味的に重複した表現がある。「透明さを保つことが求められるべきである。」という文も「求められる」と「べきである」が重複しているので、不自然である。よく似た問題を含むものに「虐待防止のために重要なのは児童相談所の職場の人数を増やすべきだ」があった。「重要である」ということと「べきである」は意味論的に重複している。丁寧で、客観的なスタイルが求められる論文において、「外出する」を「お出かけする」、「あるが」を「あるけれど」、「何もないが」を「何もないけれど」とするなど、好ましくない表現も見られた。逆接では「しかし」などがふさわしいが、「ですが」という形を使っているものも多く、「したがって」とすべきところが、「なので」「だから」となっているものも多かった。「望ましくない」「問題だ」というような指摘をする場合に、「嫌です」というような感情的な語彙を使っている例もあった。「ばかりで」を「ばかりかで」と書いている例もあった。さらに「思う存分できる」という意味のことを「いろんなことやり放題です。」と書いている例もあった。

語尾の文体をそろえる必要も教えなければならない。「・・・あります・・・冬は寒い。」というように文体が変わってしまう例も多い。

（２）実験場面２－アンケート

アンケート形式で塾の感想を書いてもらった。その中で、「なんか面白いです。」「めっちゃめっちゃ楽しかったし、うれしかったし、私の居場所にもなってとってもよい所でした。」というようにアンケートにはあまりふさわしくない表現があった。

またここでも「〇〇先生の授業で分かりやすくて、勉強しやすかった。」（「授業が分かりやすく」の誤り）「説明等でわかりやすい」（「説明等がわかりやすい」の誤り。）などの助詞の誤りがあった。「友達や先生に出会っているいろんなことを教えてくれたこと。」という表現では主語が途中で変わっているので違和感がある。

さらに「学校と違う場所で他のろうの人と交流ができて自分の中の範囲も広がって楽しい。」と表記の誤りもあった。またここでは「自分の中の範囲」という意味も意味が分かりにくい。

改善したほうがよいところ、という項目に「静寂な空間で受けた方がよいと思います。」という難聴者の意見があった。雑音があると聞き取りにくいという意味だと思われるが「静寂」という難解な漢字が書けていることが目立っているが、この文全体を見ると「受けたほうがよい」は「受けられたほうがよい」という意味であり、日本語のネイティブスピーカーには不自然である。

また塾の環境で、英語を使ってみたくなる心理が表れており、英語まじりのものが見られた。音声なしに英語を覚えることの困難についてはすでに筆者（研究代表者）は過去に研究を重ね

てきたが（斉藤 1991、2000）、ここでも「とても楽しかったです。Thank you for very much」というような簡単な英語に間違いがあった。日本語の中に英語が混じる場合の品詞の扱いについては、聴覚障害者でなくても難しい。たとえば「他人のプライバシーを侵害する」というような言い方（プライバシーは形容詞である。）が日本語に定着してしまっている。

アンケートの中に「ぜったいに入りたいと願って同じ耳のきこえない人と交流しながら、enjoy な勉強つづけければ」などという回答があり、ここでは enjoy が動詞であるという意識がなく、形容詞扱いをしている。「勉強つづける」という日本語統語論のエラーも含んでいる。名詞に「続ける」を組み合わせるならば「勉強し続ける」というふうに一旦「する動詞」の形に動詞化しなければならない。

（３）実験場面３－面接

模擬面接試験を実施し、面接の練習を行いながら、ろう・難聴の若者のコミュニケーションを観察した。

声を使って面接に臨む場合、「うん」という相槌が多く、「はい」という習慣があまり身につけていない人が多い。また語尾に「ます」「です」を正しくつけることができない人も見られた。

また、若者に共通するものかもしれないが、お礼や挨拶のことばが正しく言えない人が多い。

聴覚障害者に特有の問題であると思われるものに、質問されてすぐに答えるという傾向がある。一呼吸置くとか、音のピッチやイントネーション、速度を相手に合わせるというのは音がよく聞こえてこそ身に着くコミュニケーションスキルである。

また、情報保障をつける場合、面接官の言うことがすべて文字にされたかどうかよく確認せずにあやまった受け答えをすることがあり、メールよりも誤解が多い。パソコンの場合も手話通訳の場合も、面接官の口や表情を見るタイミングと画面や通訳士を見るタイミングや時間のずれで、誤解が生じることがある。特にパソコン速記の場合、面接官の発話をそのまま文字にすると書記日本語と違いがゆえの分かりにくさもある。しかしこの点は聴者の理解と努力も必要である。合理的配慮が求められるようになり、手話通訳やパソコン速記が増えてくると、それに対応する聴者のほうのマナーも問われることになる。

VI. 教授法の開発

上記のような聴覚障害者の日本語のエラーから集中的にエラーの多いものを習得させるには例文を作ったり短文をつないだりするような課題を与えるのがよいと思われる。集中的に文法を意識させて覚えさせるほうが能率がよい。たとえば以下のようなものである。被験者の中でエラーの多かったろう者に解答してもらった。解答の中のエラーを取り出して、解説しながら、同じエラーを繰り返さないためには、このような形で体系的に練習するのがよいと思われる（参照：英語教育の focus on form）。

まず被験者に「以下のことばを使って短文を作ってください」という課題をやってもらった。

（課題１）「全然・・・なくて・・・から、・・・」

ある被験者は「全然私にきづかれなくていいから、ただ疲れたから先に帰った。」と答えた。全体に意味がよくわからないが、「気づかれなくてちょうどよいから」というような意味かもしれない。（この問題は「全然電話が通じなくて、困ったから、家まで行くことにした」というような答えを想定している。）次に

（課題２）「・・・そこで、・・・」

という課題について、ある被験者は「今年入って一番泣くくらいのできごとうれしさが無い。そこで11月1日 HANDSIGN ががっこうに来ることになり、私は今最高にうれしい所です。」と答えた。この「そこで」という接続詞の意味論的エラーが文の意味を不明にしている。

また短文をつなぐ課題を与えた。一文になれば順番など変えてもかまわないこととする。

（課題３）

- ① いつも損をしたような気がします。
- ② 私の誕生日は12月24日です。
- ③ 12月24日はクリスマスイブです。

「私の誕生日は12月24日ですが、12月24日はクリスマスイブですので、いつも損をしたような気がします。」が一番よい並べ方であるが、ある被験者は「12月24日はクリスマスイブですが私の誕生日でもある。だがいつも損をしたような気がします。」と答えた。一文にできていないのと、文体が変わっていることが問題である。同様に

（課題４）

- ① 私はつい食べ過ぎてしまう。
- ② お母さんはプリンをたくさん作ってくれる。
- ③ プリンは私の大好物だ。

の場合、被験者は「プリン是我的大好物でお母さんはプリンをたくさん作ってくれるがつい食べ過ぎてしまう。」という答えがあった。逆接の助詞の使い方、主語が不明確という問題のある作文になった。さらに

（課題５）

- ① 兄は絵が上手ではない。
- ② 兄は絵を描くのが好きだ。
- ③ 兄はいつも絵を描いている。

について被験者は、「兄は絵を描くのが好きでいつも描いている。でも絵はじょうずではない。」と一文にすることができなかった。やはり逆接の助詞が使えないからであると思われる。

（課題 6）

- ① お母さんはいなかった。
- ② 冷蔵庫にケーキがあったので食べた
- ③ 家に帰った。

については「家に帰ったらお母さんはいなかったので冷蔵庫にケーキがあったので食べた。」と答えた。最初の「ので」の使い方が適切ではない。ここでは逆接を使うべきである。

次に助詞についてエラーが多かった態の正しい使い方を覚えさせる課題を作った。能動態の文を受動態に書きかえる問題を課した。

（課題 7）

彼は前にいた人を追い越した。

を受動態にきなさいという問題では、被験者は「前にいた人を彼が追いこした」と書いた。これは受動態になっていない。特に手話者は受動でも能動でも手型は同じで、方向を自分から相手または三人称の誰かに向けて動かすことで表せるので、日本語のように活用を覚える必要がない。

（課題 8）

人々は彼を尊敬し、慕っていました。

を、被験者は「人々は彼に尊敬し、したがわれていました。」と答えた。「人々は」を主語にしているところで、既に受動態は成り立たなくなる。「慕われていました」が「したがわれていました。」となっているのは受け身の作り方に影響され、「慕われる」ということばを「したがわれて」ということばと混同してしまっている。

（課題 9）

山の植物は朝日に照らされた。

については「植物は山の朝日に照っている」と答えた。主語が同じであるので態を変えたことにならない。さらに受動態を能動態に変える課題も与えた。

(課題 10)

おばさんは町の人々に頼りにされている。

これを被験者は「町の人々におばさんはたよりになっている」とした。「町の人々が」というふうに主語を変えなければならないことが、ろう者にとっては難しいのである。これは手話という主語を明確にしなくても方向で明らかになる言語に慣れているろう者にとっては、かなり難しいと思われる。

おわりに

本研究では、これまで日本語においては研究されてこなかった聴覚障害者の書記日本語の言語学的問題が体系的に取り出された。日本手話の構造が持ち込まれたエラーと、音が聞こえない、したがって自然な経験が極めて少ないという理由による日本語の習得の困難さが現れたエラーを収集することができた。言語学的視点から分析すると、エラーにも法則があることがわかり、それを体系的に教えることで日本語を書くスキルは格段にアップすると思われる。

日本手話者のエラーは母語と日本語の統語論的差異（つまり文法の違い）や形態論的差異（つまり語彙の構成の違い）に起因することが多い。すなわち態や格が手の動きで物理的に表せてしまう日本手話者にとって、それをあらわす語形変化や助詞をマスターすることは動機もないし、実際マスターしようとしても難しい。さらに語用論的には経験が少ないということに加えて、男女差や謙譲語・尊敬語の縛りが日本手話では日本語ほど多くないということも影響しているであろう。またろう学校の子どもたちと聞こえる教師たちはコミュニケーションをとること自体に困難があり、ことば遣いの細やかな指導の時間はあまりないのも事実である。

他方、難聴者やまったく（あるいはほとんど）聞こえないが、手話は獲得しなかった「日本語話者」のエラーについては音韻論的な問題と経験の偏りに起因するものが多い。難聴者の場合、ある程度聞こえているからこそ口語体も覚えているのであるが、その使い分けの経験が少ないために使ってはいけないところで口語体を使ってしまうというエラーが見られた。

しかし両者とも最も不利なのは音声言語たる日本語を読み書きしなければならないということであり、エラーには共通のものも多い。

聴覚障害者のための書記日本語の問題は上記のようなエラーをヒントとした言語学的・体系的な教授法を行うことで解決できると思われる。この研究の結果を利用して、就労・進学・資格取得等に有益な書記日本語のためのマニュアル「学校だけではわからない。コミュニケーションスキルアップ・ハンドブック」を作成した。現状の福祉施設・教育機関等で活用されることを期待する。

参考文献

- Brueggemann, Brenda Jo, (2004), *Literacy and Deaf People*, Gallaudet University Press
- Gallaway, Clare and Alys Young, (2003), *Deafness and Education in the UK --- Research Perspective*.
Whurr Publishers
- Schirmer, Barbara, (1994), *Language and Literacy Development in Children who are Deaf*, Mcmillan
Publishing Company
- Panda, Sibaji and Ulrike Zeshan, “The Acquisition of English Literacy Skills by Deaf Adults in a
Bilingual Classroom Setting in India” , [www.ub.edu/ling/tislr8/Zeshan- Panda.doc](http://www.ub.edu/ling/tislr8/Zeshan-Panda.doc) (2013)
- 斉藤くるみ (1991)、「日本の大学における聴覚障害学生に対する英語教育の問題点とその改善
策」、『社会事業研究所年報』、27、29-50。
- _____ (2000)、15.「日本の大学における聴覚障害学生に対する英語教育の問題点とその改
善策 (2000 年)」、『社会事業研究所年報』、36、1-19。

「学校だけではわからない。コミュニケーションスキルアップ・ハンドブック」は日本社会
事業大学聴覚障がい者大学教育支援プロジェクト室にて無料配布している。